

兒童と教科過程 (二)

デユキ一著

大塚喜一譯

斯かる論争は其論理的終結に至る事極めて難きものである。常識は兩者の見解の餘りに相違せるに畏縮してしまふ。而して是等の論は學者に残され、一方常識は不合理なる妥協の困惑の中を前後に動搖する。學說と實際的常識とを一層密接に相結合せしむる事の必要は、吾人の原本的論題への復歸を暗示する。即ち吾人は茲に教育的過程に於て互に必然に相關係せしむべき諸條件を有する、それ故に問題は正しく相互作用と調整とにあるのである。

吾人は先づ、子供の經驗と、學習の課程を造れる主題の諸種の形式との間に(程度の差は色々あるが)或種の破れ目があるといふ偏見を打破せねばならぬ。子供の方から云へば、如何にして彼の經驗が形式的に提供せらるる學習の中に入つて居ると同種類の諸要素——事項や眞理——を既に其中に含有せるかを見る事が問題であり、更に重要なるは、彼の經驗が、其主題をそれが現在占有せる場面に迄發展せしめ組織あらしむる過程の中に作用せる態度や動機や興味を其自身の中に如何にして包含せるかの問題で

ある。學習の側から云へば、兒童生活の中に働ける諸力の發現として學習を解釋する事、及子供の現在の經驗と其一層豊富なる成熟との中間に位すべき諸段階を發見する事が問題である。

學課の主題が子供の經驗外に於てそれだけで固定せる既製の何者かである如き概念を捨てよ。又、子供の經驗を何か固定せる如くに思ふ事を止め、之を流動的な胚胎せる生氣脈々たるものとして見よ。然らば吾人は、子供と學課とは唯一の過程を定むる所の二極限である事を實認する。丁度二點が一直線を決定するが如く、子供の現在の立脚點と學課の諸事項や諸眞理とは教授を決定する。それは、子供の現在の經驗から、我等が學課と稱する眞理の有機體に於て代表されたるものに向つて動ける繼續的改造である。

算術・地理・語學・植物學科はそれ自身經驗である——是等は種族の經驗である。是等は一時代より次の時代へと相續ける人間種屬の努力・奮闘・成功の集積的成果を表示(體現)してゐる。諸學科は、單なる蒐集や經驗の斷片の雜多な集塊ではなくして、或る組織され系統立ちたる方法に於て、即ち反省的に式にて示されたる所に此事を表現してゐる。

それ故に、子供の現在の經驗内に入り來る諸事項や諸眞理と、學習の主題の中に含まるゝそれ等とは一實體の最初と最後の項である。其一に他を對立せしむる事は、成長しつつある生活の初期(幼兒態)と成熟期(成熟せる状態)とを對立せしめる事である。そは、同じ過程の動ける傾向と完了せる結果とを互

に對抗の位置に置く事であり、子供の性質と運命とを互に戦はしむる事である。

若し然らば、児童と教科過程との關係の問題は次の如き有様となつて現はれる。即ち、始に於て終を見得る事は教育的に言つて如何なる用を爲すものであるか。成長の早期の段階を取扱ふに當つて其後年の諸相を豫知し得る事は、如何様に吾人を助くるものなりや。吾人が此處まで論じ來れる如く、學習は子供の直接の粗野なる經驗の内に固有なる發達の可能性を表はしてゐる。しかし結局、學習は現今の直接の生活の部分ではない。然らば何故に、又は如何にして是等を説明すべきであらうか？

斯の如き疑問をなす事はそれ自身の解答を暗示してゐる。結果又は成行を見る事は如何なる方面に現在の經驗が動きつゝあるかを知る事である。但それが正常に健全に動けるものとして。遠方の一點は、單に遠方にあるといふだけでは我等に何の意義をも有せぬが、一度我等が之を運動の現在の方向を規定するものと解すれば極めて重要なものとなる。斯く考ふれば、それは到達さるべき縁遠き將來の結果ではなくして、現在に處理すべき指導方法である。成人の心の系統立てられ定義せられたる經驗は、換言すれば、子供の生活の直接如實の相を吾人に解明し、且これより誘導と指示とに推移する所に吾人に價値を有するのである。

吾人は暫らく、「解釋」と「指導」との二つの考に就て眺めて見やう。子供の現在の經驗は決してそれ自身で説明のつくものではない。それは終極的ではなくして推移的である。それはそれ自身にて完成せる

ものではなくして、或る成長傾向のしるし、又は指標に外ならぬ。我等が、子供が此處で今爲す所のみに我等の眼界を限つて居る間は、我等は混惑され又誤つて導かれる。我等は其意味を解し得ない。道德的及智的に子供を極端に價値を低減して見る事と、感傷的理想化を以て彼を賞揚する事とは、兩者に共通な誤謬に基くものである。即ち此二つの偏見は、一成長又は運動の各段階を切離した固定せる何物かとして見る事より起る。前者は、それだけでは何の望みもなく且反撥的なる諸感情や諸行爲の中に含まるゝ末頼もしさを見失ひ、後者は、子供の最も賞讃すべき美しき表明も單に兆候に過ぎず、それが成就として取扱はるる時既に子供は之を汚し且腐らせ初むるに氣付かざる考である。

我等が必要とする所は、子供に現在發芽しつゝあるものと減退しつゝあるものとの諸要素、及彼の力及弱さの表明を、それ等が各自の位置を占むる或より大なる成長過程の光の中に是等を解釋し且價を定むる事を我等に得しむる所のものである。此方途に於てのみ我等は判明し得る。若し我々が子供の現在の傾向・目的・經驗等を是等の占有せる場所から取離し、發達しつゝある經驗の中にて是等が爲すべき役目より孤立せしむるならば、總ては同一水平線上に立ち、總ては同様に善ともなれば惡ともなる。反之生活の動きの中に諸種の要素は夫々異なる價値の面上に立つ。子供の行爲の中或種のものには減少しつゝある傾向の兆候であり、それは既に其役目を果して生命ある使用の圏外に經過せる一機宜を働かしつゝある。遺物である斯かる性質に積極的注意を向くるは低き程度に發達を阻止する事となる。成長の根本

的な相を支持する事は系統的な考へ方である。又、他種の諸活動は絶頂に達せる力や興味を指示して居る。是等には「鐵は熱い中に打て」との格言が適用される。是等は恐らくは、今爲さなければ永久に再び來らざる所のものであらう。是等は撰擇され利用され強調されるれば、子供の全生涯に於て善への轉向點を印すであらう。是等を忘れれば、機會は過ぎ去りて再び呼返すに由もない。又他の諸行爲や諸感情は豫現的であり、遠き將來に於てのみ炳々たる光を放つべき曙光を表はしてゐる。是等に就ては現在に於て爲さるゝは僅ではあるが、將來に向つて一定の方向を期待しつゝ都合よき且充分なる機會を與ふべきである。

全般的に見て、「舊教育」の弱點は子供の未熟と大人成熟との間に忌むべき比較を作り、前者を出來るだけ早く且出來るだけ多く之を除去すべきものと考へた所に存するが、一方「新教育」の危険は、子供の現在の力や興味をそれ自身に終極的意義を有すと考ふる點に存する。實は、彼の學習や到達は流體で動けるものである。それは日より日へ、時より時へと變ずる。(以下次號)